様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年 ５月１７日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2007～2010
課題番号：19202022
研究課題名（和文） 公共文化の胎動：建国後の合衆国における植民地社会規範の継承と断絶に関する研究
研究課題名（英文） Creating Public Cultures: Continuity and Discontinuity of Social Norms in the United States from the Colonial to the Early National Period
研究代表者 遠藤 泰生（ENDO YASUO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50194048

研究成果の概要（和文）：領土の拡大と大量移民の流入を規定条件に建国後の国民構成が多元性を増したアメリカ合衆国においては、社会文化的に様々の背景を持つ新たな国民を公民に束ねる公共規範の必要性が高まり、政治・宗教・経済・ジェンダーなどの植民地時代以来の社会諸規範が、汎用性を高める方向にその内実を変えた。18 世紀と 19 世紀を架橋するそうした新たな視野から、合衆国における市民社会涵養の歴史を研究する必要性が強調されねばならない。

研究成果の概要（英文）：In the early national period in the United States, the necessity of creating the new nation called for social norms which bound together a population of different origins. To meet this demand, the norms inherited from the colonial period in politics, economy, religion, gender, and so forth, were transformed in the process of taking into account a variety of local and ethnic differences. It is necessary for students of both the colonial and national periods to inquire into the history of civil society which emerged from this dramatic social and cultural change in the 18th- and 19th- century United States, taking into consideration the comparative cases of other nations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
2008 年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
2009 年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
2010 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
総　計	26,300,000	7,890,000	34,190,000

研究分野：アメリカ地域研究
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：公共文化、市民社会、アメリカ合衆国、独立、共和主義、印刷文化、キリスト教、人種

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者が編集に携わった『史料で読むアメリカ文化史① 植民地時代 15 世紀末-1770 年代』（東京大学出版会、2005）、荒このみ編『史料で読むアメリカ文化史② 独立から南北問題まで 1770 年代-1850 年代』（東京大学出版会、2005）を刊行する際に、独立建国を分水嶺に、独立までと独立以降を専門とする研究者集団が交流を欠いたままで研究を続けている日本の学界状況が明らかとなった。それが、植

民地時代史と建国時代史との有機的な総合が不十分である大きな原因であることがわかった。

（２）初期アメリカ学会（代表大西直樹、副代表増井志津代）が開催する定例研究会においてアメリカ近代史研究に携わる多くの研究者と知見の交換をする環境が整っていた。

２．研究の目的

（１）植民地時代から建国期を経てアンティベラムの時代へと続く合衆国の歴史を、途絶えることのない一つの包括的な視点から説明する研究が少ない。この分断された歴史理解を架橋する視点を探りつつ、近代合衆国史像を見直すことに第一の目的をおく。

（２）当該時期の研究を行う研究者の組織化は国内外において、他の時期の研究者の組織化に比べ、大きく立ち後れている。それを是正すると同時に国内外の研究者の交流を促進することに第二の目的をおく。

（３）研究代表者が所属する東京大学アメリカアメリカ太平洋地域研究センターを起点に、本研究で得られた成果を電子媒体他を通して積極的に発信し、本研究が扱う時期の研究が低迷気味である日本の研究状況を活性化させることに第三の目的をおく。

３．研究の方法

（１）独立革命を境に分断されがちな合衆国史像を架橋するために、植民地社会諸規範の継承と断絶という視点を導入し、18 世紀から 19 世紀へと継承されたものの内容を具体的に明らかにする。その際、「政治規範」「宗教規範」「経済規範」「ジェンダー規範」「人種規範」「公共規範の越境」に検証する分野を細分化し、独立建国をまたいだ約一世紀半の間に起きた規範ごとの変化とその相互連関を研究者の共同討議で明らかにする。

（２）続いて、以上で得られた知見を公共圏および公共文化の胎動という視点から学際的に再統合し、国民国家の基軸たる公共の政治文化と植民地時代に醸成された複数の社会規範のつながりを明らかにする。そこから合衆国近代史像の見直しを図る。

（３）国内外の研究者との交流を活発化させるため、定例の研究会を年に 6 回程度開催しながら、夏期合宿セミナー、海外からの招聘研究員を含めた公開の研究セミナーを連続的に開催する。

（４）アメリカ太平洋地域研究センターに研究の拠点をおき、当該分野の基本資料を図書･電子媒体などで購入･所蔵し、その内容を分析する。

（５）日本アメリカ学会の年次大会に初期アメリカ分科会の設置を申請し、日本の若手研究者全体でこの研究成果を共有する。

４．研究成果

（１）植民地時代から建国期に継承された主たる政治規範は「共和主義」とされる。ただその内容が革命の前後で大きく変容したことは周知のとおりである。すなわち、知的エリートを核とする選ばれし者たちの抱いた古典的共和主義が白人成人男子に平等の政治権利を与える近代的共和主義にとって代わられ、徳や公共善などの言葉を継承しつつも、その内容に明らかな断絶が生まれたのである。注目すべきは、古典的共和主義に内在した恭順のベクトルだけは革命を越えて、近代共和主義に継承され、それが自由主義の絶対化を 19 世紀社会に胚胎させたことであろう。中野はその点を政治思想史の視点から明らかにした。一方英帝国全体に視野を広げると、共和主義以外の政治規範の継承と断絶の位相があらたに明

らかとなる。例えば、西部開拓前線が醸成する「公共の利益」には、ロンドンの帝国議会が考える英帝国全体の利益を勘案した「公共の利益」と、開墾に直接携わる植民地人が考える「公共の利益」の二通りの意味が含まれた。そしてその二つの「公共の利益」の断絶が植民地政治体の自律＝独立を促す要因の一つとなったことが森の研究で示唆された。しかし､建国後に大きな共和国が建設された時、その断絶が解消されたかと言えば疑念が残る。英帝国に対しての断絶は継承しつつも、新たに誕生した各州間には、西部領土がもたらす「公共の利益」に関する別の意味での理解の断絶が生じたからである。建国期合衆国における社会変動の複雑さを示す継承と断絶の事例をここに見いだすことができる。

（２）植民地時代から建国期における継承と断絶という側面から最も興味深い事例を提供したのは宗教規範の分野においてであった。政教分離は建国以来の合衆国の国是とされるが、その生成の歴史には依然、議論の余地が残る。例えば、世俗と信仰世界とを截然と切り離すことを求めたジェファソン的な政教分離と、公定宗教の存在を認めた上での多宗教状況を認めるアダムズ的な政教分離と、政教分離にも様々の型がある。日本においてはその理解がいまだに混乱していることが、奥山倫明や藤本龍児らを招いた研究会でまず明らかになった。そのうえで、例えばマサチューセッツ植民地では、独立建国期に政治と宗教の位置関係が逆転した可能性を佐々木が明らかにした。すなわち、そもそも信仰信条の自由を護るのが政治の役割であったはずなのに、後年は、政治における思想信条の自由を担保する役割が宗教に期待されるようになったというのである。言葉を換えて言えば、政教分離の外形を継承しつつその実質においては大きな断絶が存在することがここでも示唆されたことになる。

（３）（１）や（２）にみる継承と断絶の理由の一つは、領土の拡大と大量移民の流入を規定条件に建国後の国民構成が多元性を増したことにある。様々の社会文化的背景を持つ新たな国民を公共の文化を共有する公民に仕立て上げるうえで、政治や宗教はその個別性よりも汎用性を高める方向に内実を変容させたのであった。さらにそうした公民の創出に大きな役割を担ったのが印刷活字文化であったことが多くの研究で明らかにされている。その際、プロテスタント信仰に根付く聖書主義がプロテスタント・ヴァナキュラーと呼ばれる活字文化を涵養し、その文化を通して 18 世紀末から 19 世紀にかけてのアメリカ思潮に一つの大きな流れが生まれた点を海外研究協力者の一人であった D.Hall や山田らが論じている。ただし、プロテスタント・ヴァナキュラーを表現のスタイルとしては継承しつつも、保守伝統主義のオーソドクシーと自由主義的ユニテリアンの間には、思想信条の上での断絶が生じたのであり、植民地諸規範と建国後の社会規範との連関を立体的に理解するためには、公共の涵養を小説の使命とすら考えた当時の文人・知識人の言葉等を手掛かりにさらに詳しい検討を加える必要がある。そのことを増井や平井が明らかにした。同じ活字文化の中で「感傷小説」と呼ばれるジャンルが 19 世紀前半に隆盛したことが知られる。18 世紀末と 19 世紀半ばの代表的な「感傷小説」の比較プロット分析から、田辺は、個人の努力の賜としてではなくコミュニティ内の討議を通して生まれる公共の家庭像を明らかにした。モルモンにおけるポリガミーの制度化を「公共」と「異

端」のせめぎ合いの歴史に位置づけた海外研究協力者の R.T.Ulrich や、19 世紀半ばにおける女性のジェンダー役割を女医の制度化の歴史から逆照射した荒木の研究と同じく、ひろく社会に認められる社会ジェンダー規範と宗教規範が大きく関連していることが本研究では明らかとなった。ただ、その連関の具体的位相については検討がまだ十分ではなく、他の研究プロジェクトにその解明が持ち越されることとなった。

（４）人種規範と経済規範については十二分な解明が出されなかった。研究会で言及されることの多かった D.Waldstreicher 他が示唆するとおり、黒人や女性他の通念的意味でのマイノリティーがヘゲモニーを有する排他的市民公共圏を縁取る脇役として、建国後の合衆国における公共文化の醸成に裏面から寄与した可能性はあろう。公共性の議論に深甚の影響を及ぼし続けるハーバーマス以来この種の問題系は指摘され続けてきた。ただ、そのハーバーマスも指摘するとおり、そうした市民的公共圏と周縁の人々との権力関係は決して一方向的なものではなく、双方向的な公共文化の醸成が為されたはずである。しかし本研究はその双方向的政治文化の力学を十二分には明らかにできなかった。なお、こうした 19 世紀の「公共」規範がアメリカ史全般に占める位置を、20 世紀転換期にみられた救貧運動、福音主義運動、セツルメント運動などの「ソーシャルワーク」の歴史を振り返りながら、松原が検討した。矢口や高橋が担当した、「公共文化の越境」という共時的視野からの 19 世紀合衆国公共文化の検討と、松原らが試みる通時的視野からの同公共文化の検討作業は、引き続き、多くの共同研究者の手をかりながら継続すべき課題として残る。

（５）日本における当該分野の研究を活性化することが、本研究を立ち上げた一つの目標であった。その点においては大きな成果を出すことができた。まず、日本アメリカ学会年次大会「初期アメリカ」分科会において、2009 年には橋川、2010 年には森が発表を行い、当該分野の研究の活性化に大きな寄与をなした。2011 年には英国史の若手研究者も加えた形で同分科会が開催される予定であり、「公共」に着目することでアメリカ例外主義の伝統を越えた英米史研究の交流を起こすという副次的成果も生むこととなった。

（６）遠藤が所属する東京大学附属アメリカ太平洋地域研究センターには本研究が購入した初期アメリカ新聞集成の電子コレクションが所蔵され、そのほかにも、当該分野の多くの二次文献が集積された。これらは全て日本全国の研究者に公開されている。

（７）招聘海外研究協力者との研究交流はきわめて活発で大きな刺激を日本の研究者に与えた。Bard Graduate Center of NY の David Jaffee をかわきりに、D. Hall. L.T. Ulrich, Alan Taylor, David Armitage, Joyce Chaplin, Ned Landsman ら当該分野を代表する研究者らがアメリカから来日、アメリカ太平洋地域研究センターを訪れたオーストラリアやフランスの研究者も交えた交流の場を生み出した。その恩恵に最も浴したのは、東京大学、京都大学、名古屋大学、上智大学などの若手研究者・大学院生であったかもしれない。彼らの中の多くが、招聘教授との間に築いた関係をもとに米国の大学に留学することとなった。本研究によって播かれた種が将来大きな実りとなって我が国に戻ってくることは間違いない。

（８）以上の成果は論集にまとめられ、2011 年度に刊行される予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１５件）

① 橋川　健竜、十九世紀前半のアメリカ合衆国における農村型事業の変質　ニュージャージー州南部の製鉄所における労働管理、千葉史学、査読有、55 巻、2009、13-28
② 増井　志津代、マーク・トウェインと福音主義の時代、マーク・トウェイン研究と批評、査読無、8 巻、2009、42-53
③ Masui, Shitsuyo、Rethinking Puritan Studies in a Transatlantic Context、Proceedings, The 44th ASAK International Conference: The Futures of America、査読無、2009、88-94
④ 田辺　千景、ヘンリー・ジェイムズとアメリカ感傷／家庭小説、学習院大学文学部研究年報、査読無、56 輯、2010、57-73
⑤ 矢口　祐人、展示評の問題と可能性－アリゾナ記念碑を中心に、歴史学研究、査読無、854 巻、2009、20-27
⑥ 荒木　純子、エリザベス・ブラックウェルにおける専門職と性差と身体生理－19 世紀半ばのアメリカにおける医学と女性、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、査読有、No.19、2008、43-62
⑦ Shitsuyo Masui、Reading The House of the Seven Cables in the Context of the Nineteenth-Century Urban Burial Reform Movement、The Japanese Journal of American Studies、査読有、No.19、2008、43-62
⑧ 平井　康大、バラク・オバマ大統領と慈善的選択、国際宗教研究所ニュースレター、査読無、61 巻、2009
⑨ Yasuo Endo、The Cultural Geography of the Opening of Japan: The Arrival of Perry’s Squadron and the Transformation of Japanese Understanding of the Pacific Ocean during the Rdo Period、ACTA ASIATICA、査読有、93 巻、2007、21-40
⑩ 松原　宏之、異性愛という制度－現代アメリカ同姓婚論争の根にあるもの、シリーズ・アメリカ研究の越境　個人と国家のあいだ＜家族・団体・運動＞（ミネルヴァ書房）、査読無、2007、19-42
⑪ Matsubara, Hiroyuki、“Sometime Allies, Sometime Competitors: Men and Women in the Commission on Training Camp Activities, 1917-1919”、The Proceedings of the American Historical Association 121st Annual Meeting、査読無、＃10485、2007、1-13
⑫ 岡山　裕、二大政党－争点志向の政治への適応、シリーズ・アメリカ研究の越境　個人と国家のあいだ＜家族・団体・運動＞（ミネルヴァ書房）、査読無、2007、87-109
⑬ 平井　康大、心の習慣を求めて：プロミス・キーパーズと「新しい男性」、シリーズ・アメリカ研究の越境　個人と国家のあいだ＜家族・団体・運動＞（ミネルヴァ書房）、査読無、2007、225-342
⑭ 増井　志津代、ピューリタニズムと寛容主義－王政復古期以降のニューイングランドを中心に、ソフィア、査読無、218 号、2007、245-270
⑮ 中野　勝郎　自由の暴力、秩序の暴力、言葉と暴力－ウィスキー反乱における政観の交錯、権力と暴力（ミネルヴァ書房）、査読無、2007、63-84

〔学会発表〕（計１０件）

① 荒木　純子、アメリカ女性と専門意識－エリザベス・ブラックウェル（1821-1910）と女性医師たち、第 44 回人類動態学会全国大会シンポジウム「女性の外働きと生活行動」、2009 年 6 月 14 日、日本女子体育大学
② 橋川　健竜、18 世紀ブリテン帝国の戦争と先住民の表象　モホーク族の図像を中心とする序論、アメリカ学会、2009 年 6 月 7 日、津田塾大学
③ 矢口　祐人　Remembering Pearl Harbor: the Image of Hawaii in Japan during World War Ⅱ、Asian Studies Initiative、2009 年 11 月 4 日、College of William and Mary
④ 橋川　健竜、1740 年代の新聞に見る、周縁としての新大陸、アメリカ学会、2008 年 6 月 1 日、同志社大学
⑤ Hiroshi Okayama、Creating the ‘Supreme Court of Finance’: U.S. State-building and the Judicial Roots of the Federal Reserve Board、Midwest Political Science Association、2008 年 4 月 4 日、米国イリノイ州シカゴ
⑥ 中野　勝郎、現代アメリカの保守主義、日本政治学会、2007 年 10 月 6 日、明治学院大学
⑦ 矢口　祐人、Embodied Memory: Would War Ⅱ Monuments and Their Hidden Histories、American Historical Association Pacific Coast Branch、2007 年 8 月、ホノルル

⑧ 増井　志津代、ピューリタニズムと二つの文化－19 世紀ニューイングランドのネオ・カルヴィニズムとユニテリアン、サウンディング英語英文学会、2007 年 10 月 6 日、日本大学
⑨ 平井　康大、宗教右派としてのプロミス・キーパーズ、成城大学経済研究所、2008 年 1 月 31 日、成城大学
⑩ Matsubara, Hiroyuki、“Sometime Allies, Sometime Competitors: Men and Women in the Commission on Training Camp Activities, 1917-1919”、The American Historical Association 121st Annual Meeting(2007): session 65、2007 年 1 月 5 日、アトランタ（アメリカ合衆国）

〔図書〕（計１０件）
① 松原　宏之、明石書店、『権力と身体』「社会の護持と改編－二〇世紀初頭アメリカの性衛生学者モローをめぐって」、2011、61-78
② 矢口　祐人、中央公論新社、憧れのハワイ、2011、251
③ 増井　志津代、上智大学出版、キリスト教のアメリカ的展開－継承と変容、2011、1-22、105-129
④ 佐々木　弘通、日本評論社、憲法の理論を求めて　奥平健保学の継承と展開、2009、93-120
⑤ 山田　史郎、昭和堂、識字と読書－リテラシーの比較社会史、2010、185-203
⑥ 荒木　純子、青木書店、アメリカ・ジェンダー史研究入門、2010、31-50
⑦ 松原　宏之、青木書店、アメリカ・ジェンダー史研究入門、2010、113-117
⑧ 高橋　均、中央公論新社、世界の歴史 18 ラテンアメリカ文明の興亡、2009、16-63, 283-509, 549-571
⑨ 遠藤　泰生、東京大学出版会、大人のための近現代史・19 世紀編、2009、249-251
⑩ 遠藤　泰生、財団法人放送大学教育振興会、アメリカの歴史と文化、2008、272

〔その他〕
ホームページ
http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/

CPAS Newsletter Vol.8-11 にセミナー報告の記載あり

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤　泰生（ENDO YASUO）
東京大学･大学院総合文化研究科･教授
研究者番号：50194048

(2)研究分担者
荒木　純子（ARAKI JYUNKO）
青山学院女子短期大学･英文学科･准教授
研究者番号：20396831
増井　志津代（MASUI SHITSUYO）
上智大学・文学部・教授
研究者番号：80181642
中野　勝郎（NAKANO KATSURO
法政大学・法学部・教授
研究者番号：70212090
松原　宏之（MATSUBARA HIROYUKI）
横浜国立大学･教育人間科学部･准教授
研究者番号：00334615
平井　康大（HIRAI YASUHIRO）
成城大学・社会ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ学部・教授
研究者番号：40251334
山田　史郎（YAMADA SHIRO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：30174717
（H20 からの参加）
佐々木　弘通（SASAKI HIROMICI）
東北大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：70257161
（H21 からの参加）
田辺　千景（TANABE CHIKAGE）
学習院大学・文学部・准教授
研究者番号：10316812
（H21 からの参加）
森　丈夫（MORI TAKEO）
福岡大学・人文学部・講師
研究者番号：90330894
（H21 からの参加）
矢口　祐人（YAGICHI YUJIN）
東京大学･大学院総合文化研究科･准教授
研究者番号：00271700
（H20→H22：連携研究者）
高橋　均（TAKAHASHI HITOSHI）
東京大学･大学院総合文化研究科･准教授
研究者番号：50154844
（H20→H22：連携研究者）
橋川　健竜（HASHIKAWA KENRYU）
東京大学・大学院総合文化研究科･准教授
研究者番号：30361405
（H20→H22：連携研究者）
岡山　裕（OKAYAMA HIROSHI）
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：70272408
（H21→H22：連携研究者）